受賞者氏名	赤松　佳珠子	
所属	デザイン工学部　建築学科	
受賞年月日	①2022 年 5 月 14 日 ②2022 年 5 月 30 日	
国内･国外	国内	
授与機関等名称	①一般社団法人日本建築学会東北支部 ②一般社団法人日本建築学会	
受賞名	①第 42 回東北建築賞　一般建築部門･特別賞 ②2022 年日本建築学会作品選奨	

受賞(研究)内容詳細	【山元町役場】 ①第 42 回東北建築賞　一般建築部門・特別賞 ■賞概要 東北地方においてその建築文化や環境形成の向上に貢献し、地球環境時代に相応しい優れた建築作品、東北地方で発表された将来性が期待される研究活動、その他建築分野にかかわる重要な業績を顕彰することにより、東北地方における建築水準の発展に寄与し、学会と地域社会の交流を図ることを目的とする。 ■審査委員より講評 震災後に整備された新しい道路が緩やかにカーブする先、切り通しの隅から顔を出す控え目な存在感が、この建築のコンセプトを象徴的に示しています。深い庇下空間が外周を囲う裏のない造形は、まちの未来をみんなでつくり上げていく求心的な場としての庁舎に対する解答として明快であるだけでなく、空間の活用方法や自然条件への対応等を総合的に考慮して導かれたものとして、高い説得力を有しています。内部はワンルームの中に「スモール・コア」を離散的に配置して、開放性と分節性とを両立しています。物理的な距離や視線の制御（見える/見えない）に加え、明るさや静けさの分布を設定した屋内のレイアウトは、ワンルームの中に程良いグラデーションを生み出しており、秀逸です。住民スペースの有効性等に対する評価が議論となりましたが、建設過程で繰り返されたワークショップに注がれたエネルギーや、竣工後に内部の環境を測定して設計の妥当性を検証する姿勢も含めた総合性において、東北建築賞特別賞に相応しいと評価されました。 ②2022 年日本建築学会作品選奨 ■賞概要 日本建築学会作品選奨は、その年の作品選集に掲載された作品であって、学術・技術・芸術の総合的視点からみて、特に優れたものを対象とする。作品選集の刊行は、1989 年に始まり、日本における建築作品の発表の場として、国内外より高い評価を受けており、本会の最も重要な事業のひとつとなっております。作品選集掲載作品のうちから特に優れた作品を「作品選奨」として選考し表彰します。 ■審査講評 （別紙添付あり）

山元町役場 / Yamamoto Town Office　小嶋 一浩＋赤松 佳珠子＋ 大村 真也 / CAt

鳥瞰　街を見守る　建物南東に市街地へ通じる幹線道路が通る

1 階ロビーより執務スペースを見る

南東側夕景

2 階議場　ルーバー天井越しにトップライトより光が注ぐ

海と山をつなぎ、人と人をつなぐ要としてのタウンホール

東日本大震災で甚大な被害を受けた山元町役場庁舎の新築復旧のプロジェクトである。

山元町は、敷地は宮城県の東南端にあり、太平洋に面し、水田の広がる低地（東）と、山側（西）に大きく分かれている。庁舎は、ほぼそれらの中心に建ち、庁舎の建つ敷地は中央公民館、歴史民俗資料館、ふるさと伝承館などの公共施設が集まる場所でもある。東日本大震災により、まちの約 3 割が浸水し、人口減少、少子高齢化という課題に加え、震災復興としての新しいまちづくりの一端を担う庁舎の在り方が問われていた。そこで、われわれは「海と山をつなぎ、人と人をつなぐ要としてのタウンホール」というコンセプトをかかげ、2015 年のプロポーザルで設計者に選定された。求心的な要・復興のシンボルとして、人々が寄り添い、まちの復興・まちの未来をみんなでつくりあげていく、新しい庁舎を提案した。

敷地の中央に建つ鉄骨 2 階建ての庁舎は、杉の羽目板張りの大きな庇をもち、その庇下空間に展開される活動の風景がこの場所の顔となり、人々を迎え入れる。冬の山から吹き下ろす冷たい風や太陽の光など、自然条件に応答しながら、全方位的に周辺のまちとつながる、裏のない建築を目指した。執務スペースは、職員の方々とワーキンググループをつくり、新しいワークプレイスの議論を重ね、課を超えた横のつながりを生み出し、町民スペースとも一体となるワンルームとした。北面のハイサイドライトから光を取り込み、大きな 4 つの吹き抜けを通して光が 1 階まで届く明るい屋内広場のような場所である。離散的に配置されたスモール・コアによって、多様な場をつくりだしている。

このプロジェクトは、山元町行政施設等将来計画検討委員会専門部会長を務められた小野田泰明氏（東北大学大学院工学研究科教授）をはじめ、職員、議員、町民の皆さんと新しい庁舎のことだけでなく、これからのまちづくりまで、数多くのワークショップや打合せなど、さまざまな議論を重ねてきた。甚大な被害を受けたこのまちのこれからの未来について官民越えて話し合う風景こそが、新しい復興庁舎としての在り方そのものである。

この新しい庁舎が、人と人をつなぎ、新しいふるさとの風景をみんなで育てていく場となることを願っている。

（赤松 佳珠子 ＋ 大村 真也 / CAt）

1 階　町民スペースと軒下空間の一体利用可能

DATA

所在地 宮城県亘理郡山元町 / 主要用途 庁舎
建築 CAt / 構造 オーク構造設計
空調・衛生 科学応用冷暖研究所
電気 EOS plus / 建築・外構　SOY source architects
ワークプレイスアドバイザー 本江正茂（東北大学）
家具 藤森泰司アトリエ / サイン TAKAIYAMA
ファブリック 安東陽子デザイン
照明計画 岡安泉照明設計事務所
構造 鉄骨造 / 延床面積 4,226.08 ㎡
施工 加賀田組
竣工　2019 年 1 月
受賞　第 33 回日経ニューオフィス賞
2020 年グッドデザイン賞
第 1 回 JIA 東北建築大賞 2020
第 42 回東北建築賞　一般建築部門・特別賞
2022 年日本建築学会作品選奨
写真　阿野 太一

山元町役場

正会員　赤　松　佳珠子　殿
正会員　大　村　真　也　殿

この庁舎は、東日本大震災で被災した宮城県山元町に復旧新築された町役場である。

山元町は、大津波により鉄道を含む街の 3 割以上が浸水するという多大な被害を受けたことに加え、震災前から人口減少等の課題があったことから、復旧に当たり JR 常磐線を内陸側へ移動。その新しい駅周辺に住宅や学校などを集約し、庁舎がある山側の住宅地に近づけたコンパクトな街へと構造を再編している。

山元町役場はこうした再編の一環として、旧庁舎があった高台へ通じる新設された切通しの先に、街の新しい象徴、また避難時には良い目印となるであろう特徴的なシルエットをもって現れる。

現在も町の復旧は続いており、さらにその先を見据えた街づくりが継続されている状況にあって、庁舎は「みんな」を集める中心的役割を果たしており、実際に町民が頻繁に訪れていた。

オーバル形状のなめらかな全周庇は、複数の方角からのアプローチが見込まれる故の裏のないファサードを特徴づけるものである。

さらに車、バスによる来庁者をそれぞれの停車場から風雨を避けて入館できるように考えつくされており、芝生広場と町民スペースをつなぐ干渉帯や、2 階では町民や職員のテラスになっているなど、機能も無駄なく両立されている。

中に入ってみると、2 階建てで庇の先から庁舎の中央まで 30m を越える奥行きを持つ平面であるが、北側を向いたハイサイドライトからの間接光によって、安定的でありながら昼休みの消灯時でさえ暗さを感じさせない、つまり、停電時でも昼間であれば業務に支障がない照度環境になる計画が実現されていた。

このハイサイドライトがある三角屋根は全熱交換器や、太陽熱集熱器、暖気を集めるチャンバーや屋外機置場として利用されている。ここで取り入れた光や太陽熱や外気を、「スモールコア」と「ボイド」が下階に導き、上下のフロアのつながりを緊密にしている。

スモールコアは鉄骨柱とブレースで構成された壁柱ユニットとダクトや空調機をまとめた直方体で、これらがリズミカルに配置されていることで、構造的にも設備計画的にも最適でありつつ、開放的な場所と閉じた場所、多様な雰囲気を持った場がグラデーショナルに分布している。

この空間の分布はワークショップや議論をもとに計画されたものであろうが、建築計画自体は現在最適に陥らず、その議論の先も見据えた工夫が無数に重ね合わされ、普遍性を備えている。

それが運営やマネジメントだけでなく、この町の集い方と周辺環境との関係性を考え尽くし、前述した屋根、柱、壁、床、設備、といった根源的なエレメントを、高いレベルで組み合わせた発明的なシステムに依拠している点が素晴らしい。

議場の位置の変更といった根本的な計画変更すら受け止め、このシステムが揺るがなかった点はその証左であろう。

そうした経緯を乗り越え、無数の与件を統合しつつ、穏やかな「みんなの広場」「みんなの家」足り得る場所が実現されていることは特筆すべき先例になると評価し、よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。